Too Kind

やさしすぎるくらい、
やさしい
なかたね

中種子町 町勢要覧 2020

種子島 なかたね

のんびりとした島ライフ、
コントラストが美しく
心を癒す穏やかな風景。
そんな中種子町は、
個性と魅力に溢れる
七つの地区が合わさり
まちを創る。
そこに住む人たちは
「Ｔｏｏ Ｋｉｎｄ――
やさしすぎるくらい、やさしい人たち」
自然・文化・歴史・伝統・風土…
七つの豊かな個性が彩る
中種子町の魅力を
もっともっと感じてほしい
そう思いを込めて

中種子町長
田渕川 寿広

私たちの中種子町は「自立・勤労・共生」を基本理念とし、明るく・豊かで・住みよい郷土づくりをすすめています。郷土づくりの原動力は町民一人ひとりの郷土を愛する心です。

町民の皆さまには、新たな希望がもてるまちを、そして訪れる皆さまには、おもてなしの心を形にした町づくりを進め、活気あふれる町づくり、地域に根づく人づくり、心豊かに実りある地域づくりを基本に、新しい地方の時代を中種子町が担う思いで邁進しております。

地方創生のこの時期に、住んでよかった、住みたくなる中種子町を目指してまいります。ぜひ、人情豊かで、自然豊かな中種子町で心も体も癒されてください。

この町勢要覧によって、本町の実態を知っていただき、今後なお一層のご協力を賜りますようお願い致します。

CONTENTS

中種子町について ····· 03
アクセス・概要・歴史・気候・降水量・地形・地勢

熊野海岸 ····· 05
世界でここだけ 熊野アクティビティ
熊野ベイエリア

納官地区 ····· 09
納官和太鼓隊・納官剣道スポーツ少年団

増田地区 ····· 11
今姫神社むじょかひなまつり・種子島鉄砲隊
増田戦跡・移住 SURF RIDER

油久地区 ····· 15
油久の相撲部屋・油久げんき村

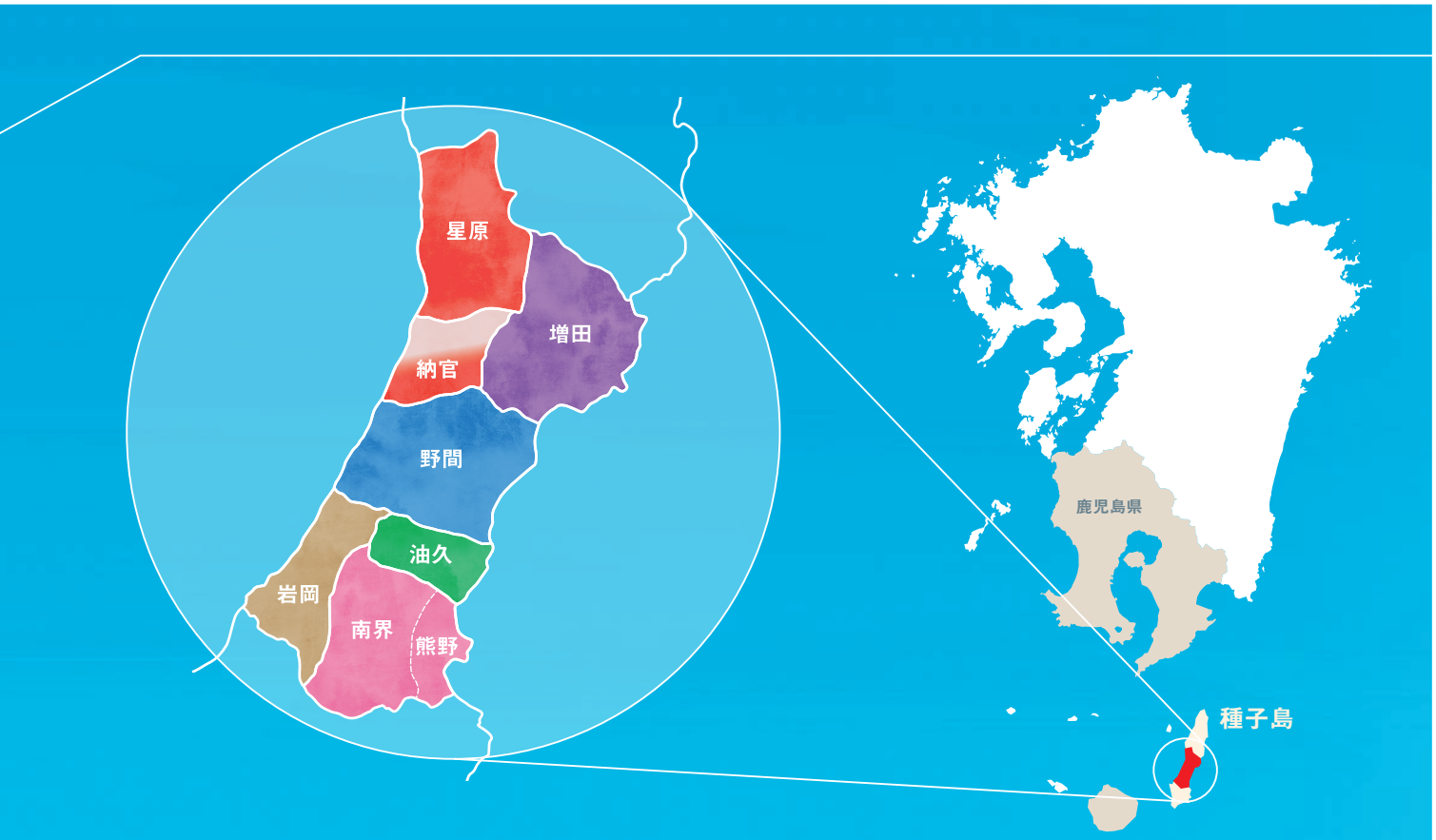
星原地区 ····· 17
星原ふるさと夏祭り
雄龍雌龍の岩・離島閃隊タネガシマン・神幸祭
大東製糖 種子島プロジェクト

南界地区 ····· 21
よっちぇいけや南界朝市・四元酒造

岩岡地区 ····· 23
うみがめ留学
町内駅伝競走大会・The Day 屋久津海岸

野間地区 ····· 27
コンパクトシティ野間
川商ハウス 西田 隆昭さん（竹屋野出身）

至福の食卓 ····· 31
中種子島行事 ····· 33
スポーツ合宿の里 ····· 35
次世代へつなぐ歴史 ····· 37
中種子町議会 ····· 39
資料編 ····· 40



アクセス

【飛行機】鹿児島空港 ── 種子島空港　1日4便運航

【高速船】鹿児島本港南埠頭 ── 西之表港　1日6便運航

【フェリー】鹿児島本港南埠頭 ── 西之表港　1日1便運航

【路線バス】船や飛行機に合わせて運行

【レンタカー】島を自由に移動できるレンタカーがオススメ

本土に一番近い南の島。始発の高速船や飛行機に乗れば10時には町に着ける距離。日帰りでビジネスも観光も気軽に行ける島である。

飛行機

東京 → 1時間50分 → 鹿児島空港
大阪 → 1時間30分 → 鹿児島空港
福岡 → 40分 → 鹿児島空港
鹿児島空港 → 35分 → 種子島空港 → バス15分 → 中種子町

新幹線

中種子町 ← バス46分 ← 西之表港
西之表港 ← 高速船 トッピー・ロケット 1時間35分 / フェリー わかさ 3時間30分 ← 鹿児島本港
鹿児島本港 ← バス20分 ← 鹿児島中央駅
鹿児島中央駅 ← 6時間30分 ← 東京
鹿児島中央駅 ← 3時間45分 ← 大阪
鹿児島中央駅 ← 1時間30分 ← 福岡

鹿児島県

種子島 中種子町

概　要

本土最南端である佐多岬から直線で40㎞、東は太平洋、西は東シナ海の間に浮かぶ種子島の真ん中にある人口約8,000の中種子町。町内は、役場がある野間を中心に7つの校区（星原、納官、増田、野間、油久、南界、岩岡）があり、校区内でも集落ごとにわかれ、どの地区も島らしいおおらかな風土に包まれ、独特の文化を持つ。住む人皆が温かい人柄で、サトウキビがゆさゆさと揺れるのんびりとした島時間が流れ、島外から移住する人も多い。

歴　史

1543（天文12）年鉄砲伝来の翌年、熊野浦に来航した南蛮船の乗員から銃の筒底を塞ぐ技術（ネジ）を得、国産火縄銃が完成。近世日本の成立に影響を与えた。
明治22年町村制実施により、種子島全体が熊毛郡となり、北種子村、中種子村、南種子村の3村が誕生しました。中種子村は、郡政時代の中郡にあたり野間、油久、納官、増田、坂井の5ヵ村で構成されていましたが、明治になって納官から牧川、油久から田島が分村、さらにその7ヵ村が統合して中種子村となった。昭和15年12月に町制を施行し、令和2年には町政施行80周年を迎える。

気　候

亜熱帯性の気候で、5月～10月にかけて月平均気温は20℃を超える。夏の期間が長く、冬の平均気温は12℃で、0℃を下回ることはまれである。

降水量

年間降水量は2,000～2,500mm。島の天気は変わりやすく、天気予報のチェックは欠かせない。特に冬になっても気温が高いので雨になることが多い。

地　形

137.18㎢の面積を有し、穏やかな丘陵地で、種子島で一番高い「回峯」でも282.3m。北部に山林地帯が多く、中央部から南部は比較的平坦で耕地が多い。

地　勢

古第三紀層及び新第三紀層。砂岩及び粘板岩の互層で、西海岸に沿って沖積砂土地帯もあり、南九州特有の火山灰土壌が多く特殊土壌の地質である。

世界でここだけ 熊野アクティビティ

大自然を遊びつくすONEDAY冒険タイム

熊野海岸は手つかずのリゾート

中種子町には、世界でここだけの「とっておきの穴場」がある。種子島特有の砂岩がつくり出したダイナミックな岩肌と波打ち際に連なる岩。透き通ったエメラルドブルーの海にアクセントのように浮かぶ無人島。そして、貴重な動植物が生育するマングローブの大群生。熊野海岸一体は、まるで外国のような景観が広がる。夕方になり、沖合の島々に西日が差し込むと景色が一変、幻想的な色彩に彩られ、夜は満天の星空を眺めながらただただ癒される。そんな熊野海岸に訪れた誰もが虜になる。今では、国内だけでなくSNSなどで拡散された絶景を目当てに外国人も年々増加している。

初心者でも安心の体験ツアー

思う存分楽しむには、初心者でも安心の体験ツアーがオススメ。カヤックとSUP（スタンドアップパドル）で海と川を巡るアクティビティツアーで、カヤックは水面を間近に感じる迫力があり、SUPは水面を歩く目線で水上クルージングを楽しめるのが魅力。熊野海岸のビーチから、沖合にある岩々の無人島や洞窟、マングローブ林を目指し漕ぎ出す。ガイドさんの案内で各ポイントごとに散策やシュノーケリングなどワクワクする体験も大人気。カヤックを漕ぎながら目の前に広がる熊野海岸の大自然は、世界でここだけの「熊野アクティビティ」。言葉では表現しきれない美しい景観の中、大自然を遊びつくす最高の冒険だ。

熊野海岸で最も美しい浜島

浜島は、熊野海岸から約1.7kmの沖合に浮かぶ無人島で、カヤックツアーで上陸することができる大人気ポイント。巨大な岩をくり抜いたような場所にプライベート感溢れるビーチと透き通った海。大小様々な岩の洞窟があり、太陽の光が緩やかに差し込む空間は神秘的な美しさ。島周辺をシュノーケリングすると色鮮やかなサンゴの群生や熱帯魚、運が良ければウミガメに出会えることも。

大自然の宝庫マングローブ林

熊野海岸周辺は、国の天然記念物に指定されているマングローブの自生地。貴重な動植物の宝庫でもあり、干潟ではぴょんぴょん飛び跳ねるトビハゼやシオマネキ、おっきいはさみが特徴のガザミと出会えワクワクしながら散策。カヤックやSUPでの川下りでは、マングローブが生い茂るアーチをくぐり抜け群生を間近に見ながら、海とはまた違った自然の雄大さを体感できる。

【ツアーのお問合せ】

ルルサン　HP http://lulu-sun.com　E-mail joe@lulu-sun.com　TEL0997-27-3110

熊野ベイエリア

自然レクリエーション村

熊野海水浴場に隣接し観光客だけでなく地元からも愛される観光拠点施設。海水浴やBBQ、キャンプなど1日中遊べる設備が揃い、ダンスにオススメの海が映る鏡張りの部屋、イベントも行える野外ステージなど施設も充実。静かな波の音をBGMに穏やかな海風と美しい満天の星があなたを極上の癒しへといざなう場所。

【施設概要】熊野海水浴場・キャンプ場・トイレ・シャワー室
調理場・管理棟
【お問合せ】自然レクリエーション村　TEL0997-27-8785

太平洋に面した熊野海水浴場から昇る朝日は絶景。

管理棟に鏡張りの部屋やシャワー室、キャンプ場に屋外炊事棟、キャビンでの宿泊やテントなどの貸出もあり年間を通して利用可。

キャンプ場では、炊事棟も充実しており手軽にBBQなどが楽しめ、町内のお店ではうれしいBBQセット（肉、魚介類・野菜・コンロ・炭付）の販売・貸出がある。

海水浴場のオープンは7月1日～8月31日。シャワー室やトイレなどの設備も充実している。

熊野ベイエリア

町営温泉保養センター

自然レクリエーション村から歩いてすぐのところにある温泉施設。地元の方から釣り客、海水浴客などが訪れ、美しい熊野海岸を眺めながらゆったりと入浴できるのがオススメ。

【営　　業】4月1日～9月30日 11:00～21:00
10月1日～3月31日 11:00～20:00
【お問合せ】中種子町役場　TEL0997-27-1111（内線281）

熊野ベイエリア

自然レクリエーション村がある熊野海岸一帯は、太平洋に面し海水浴からマリンスポーツ、カヤック、マングローブの散策など美しい大自然を利用して多くのアクティビティを楽しむことができる。

熊　野　神　社

熊野海岸近くの高台にある熊野神社は、1452年（享徳元年）島主種子島幡時公が平素から尊崇していた紀州熊野権現に詣でた際に、分霊を請うて帰り、熊野山中に奉祀したのが始まりとされる。神社には「陰陽石」という石があり「伊邪那岐命」「伊邪那美命」2柱の夫婦の神様をお祀りし、昔から縁結び、子宝、安産の神様として、種子島の人々からの崇敬を受けてきた。

「良縁がありますように」「子宝に恵まれますように」「安産でありますように」と心に念じ願いを込めてこの石を撫でると、ご利益があるといわれているとして人気のパワースポット。種子島で一番参拝者が多い神社。

夏の風物詩「よいらーいき祭り」で迫力の太鼓演奏を披露するD-STYLE。町内のイベントで演奏する納官小学校の納官和太鼓隊。

納官和太鼓隊

地域で紡ぐ和太鼓文化

笹川五男さん

納官和太鼓集団 D―STYLE

桶太鼓と横笛のお囃子で町を練り歩き、大和太鼓による迫力のストリートライブが、自然と祭り気分にさせてくれる。この奏者たちは、納官で子供のころから和太鼓を演奏する「納官和太鼓集団 D―STYLE」。迫力のある演奏と一糸乱れぬパフォーマンスは見る人を魅了し町のイベントにはかかせない存在だ。

竹を切り出し竹太鼓からのスタート

ルーツを紐解くと、平成11年に小学校に赴任した藤崎先生が、和太鼓が大好きで和太鼓を教えたいと小学校の保護者に相談。しかし小学校には和太鼓が少なく、本気で和太鼓を教えたい先生は「太鼓が無ければ竹でもいいです」と熱心に話したという。至る所に孟宗竹が生い茂る町。次の日には、保護者が竹を切り出し10組の竹太鼓を作り、学校の小さな和太鼓と合わせて演奏。これが納官で和太鼓が始まるきっかけ。この時、保護者の心意気が無ければ納官和太鼓隊は存在しなかったかもしれない。2年後の3月、竹太鼓の育成会が発足し納官竹太鼓がはじまった。

3年余りは、剣道練習の合間で練習を行い、横笛も得意な先生は、笛を交えたオリジナル曲を6曲作り、子供たちと演奏。子供たちも瞬く間に上達し、口コミで納官竹太鼓が広まりイベントに呼ばれるようになった。頑張っていたら誰かが見ているもので、役場から補助金の紹介を受け申請し、大太鼓、桶太鼓などを購入。名称を「納官和太鼓隊」として演奏にもより磨きがかかっていった。

大きな文化となった納官和太鼓

この頃に、先生の離任が近づき、結成間もない納官和太鼓隊の先行きが不安視されたが、育成会の会長だった笹川五男さんが「自分が覚えるからあと一年残って太鼓を教えてくれ」と嘆願。和太鼓の根を植え幹となった先生と、その先生から習った笹川さんが枝葉となり、その間、納官和太鼓は島外でも知られることとなり、他の太鼓隊と交流する中、TAOが3年連続島を訪れ、まだまもないD―STYLEに「種子島の活性化になる」と和太鼓を教えた。若い彼らが、今では立派な花を咲かせ和太鼓演奏が受け継がれている。

「先生が離任する話を聞いて、一生懸命やっている先生や子供たちの姿を見て終わらせたくなかった」と当時のことを振り返る笹川さん。藤崎先生の思いと地域の人たちの行動力で、大きな文化となった納官太鼓。その志は、これからも和太鼓の音色とともに子供たちに受け継がれ、納官和太鼓隊はいつまでも私たちを魅了する。

少ない人数でも1時間みっちりと稽古に励む子供たち

光博己さん

納官剣道スポーツ少年団

納官剣道伝統の秘訣

町内スポーツ少年団の先駆け

夕方、納官小学校を訪れると、体育館から「ヤー、メーン、コテー!!」と子供たちの元気な声が聞こえる。声を発するのは、剣道の稽古に励む子供たち。町中で納官の剣道は、「強い」とみんなが口を揃えて話すが、なぜ納官は剣道が強いのか。ルーツは昭和44年、スポーツ少年団の結成から始まる。納官は小規模校。人気のバレーや野球は難しい、そこで個人競技である剣道だったらと剣道で「スポーツ少年団」を結成。今では各地区にスポーツ少年団はあるが、当時はどこにも無くスポーツ少年団の先駆けであった。

剣道日本で特集されるほど盛んに

剣道は、バレーやサッカーみたいにボール一つで簡単にできない競技。人づてに防具を貰い、袴をはかずトレパンの上に防具を着け、さぁ誰が教えるかとなった時、少しやっていたということで当時の教頭と地元に住む光徳雄さんが指導。見よう見まねで見切り発車した。先生も子供も一生懸命、小学校4年生以上の子供たち全員が剣道に打ち込み、納官神社ではじめて奉納試合が開催された。光徳雄さんの後、納官剣道を長年指導した弟の博己さんは「スポーツ少年団は地域で取り組むもの。そうじゃないと地域に根づかず枯れてしまう。大人も子供も一生懸命だったから、みんなが応援してくれて、後から区長が後援会長となって地区全体で支援してくれるようになり益々稽古に熱が入った」と納官地区全体が剣道一色でまとまり益々強くなっていった経緯を話す。その後、町や島の大会で軒並み優勝。当時の剣道専門雑誌「剣道日本」で特集が組まれるほど知られ全国に紹介された。

結成50周年 続けることが後へ繋がる

納官剣道は50年の節目を迎え、光博己さんの教え子で子供たちを指導をする遠藤浩二さんは「子供の育成にスポーツ少年団は大切だけど、子供が少なくなっているからいつまで続くかわからない。それでも地区全体でやってきた剣道だから途絶えさせたくない。一番は子供たちが中学校になっても続けてほしい。それが、後に繋ぐ第一歩。剣道の一番の目標は人間形成。礼儀正しく育ってほしい」と地域や子供たちの育成にとって剣道の大切さを話す。

地域で子供の育成に関わる

どの地域でも少子化で無くなってしまうものもあるが、子供が少ないといってやめるのは簡単、続けるのは難しい。遠藤浩二さんと、光博己さんの目線は重なるように感じる。「納官は剣道が強い」それは剣道を通じて、地域で子供の育成に関わってきたからこそではないだろうか。これこそが納官剣道の伝統を次世代につなぐ秘訣に違いない。

遠藤先生と子供たちみんな笑顔で実に楽しそうだ

遠藤さんの子供も剣道を始め受け継がれていく

今姫神社 ひなまつり

むじょか

牛之原桜同志会

参道にかわいいひな人形がお目見え

400体余りのひな人形が、43段の石段にずらりと並ぶ「今姫神社むじょかひなまつり」。まつりは、向井町で地域活動をする「牛之原桜同志会」が主催。むじょかとは「かわいい」という意味。町内をはじめ全国から使われなくなったひな人形を寄付で募り、境内につながる石段や参道に丁寧に飾り付けられ、かわいいひな人形と一緒に写真を撮る家族連れなどで賑わっている。

小さな活動からはじまる地域興しの広がり

元々この集落には「向井力士会」があり、祭りで相撲を奉納する習慣が受け継がれていたが、人口減少などによって相撲をとることもなく名ばかりになっていた。そこで「なにか地域興しをやろう」と同会の若手たちによって活動を活発化させる。まずは、以前から「増田宇宙通信所（JAXA）に桜を植えたい」と話していたのを実行に移し、活動を具現化。その地名をとって名称を「牛之原桜同志会」と改め、企画から準備、運営まで行った初めてのプロジェクトが「今姫神社むじょかひなまつり」である。また、活動の中で、男女が太鼓や鐘、扇子を持って踊る、郷土芸能「ヤートセー」も35年振りに復活させるなど目に見えるカタチで活性化を図っている。「私たちだけではあまり状況は変わらないかもしれない。ただ、小さな集落でやっている活動ですけど、「あんなことできてるよね」と感じてもらいあちこちで様々な活動が出てくれば、はじめて地域興しがはじまるんじゃないかと思う」と種子島全体が盛り上がることを夢みる。

木漏れ陽の中、微笑む人形たち

始めた頃は、準備も大変で人形が集まるかも不安だったが予想以上に集まり、地域活性化の一つのカタチになっていった。使われていなかった人形たちも木漏れ陽を浴び輝きながら、牛之原桜同志会に微笑んでいるように見えるまつりである。

「むじょかひなまつり」は数日間開催され、期間中は町内外から多くの人が訪れ、見事に並ぶひな人形をバックに記念撮影をしたりして楽しんでいる。

雨天時は向井町公民館でひな人形を展示

地域で活躍する牛之原桜同志会

35年振りに復活させた郷土芸能「ヤートセー」

中種子に鉄砲を伝える

種子島鉄砲隊

大迫力!!火縄銃の一斉試射演武

鉄砲伝来の地として知られる種子島。先人達の偉業を後世に残すため、島の一市二町に鉄砲隊が結成されている。祭りのオープニングで行う一斉試射演武は、迫力ある火縄銃の轟音が響きわたり、会場からはいつも「おおー!!」と歓声が湧き上がり始まったと感じさせてくれる。そんな迫力ある中種子町の鉄砲隊を結成したのが増田地区に住む深田和幸さん。高校卒業と同時に島を離れ、51歳の時に種子島に戻った時「人が優し過ぎるくらいに優しい。子どもの頃に見た、変わらない文化がまだ残っていた」と子供の頃に感じた島の温もりが脳裏に甦る。

鉄砲隊への憧れで一念発起

増田に戻ってからは、ひなまつりの企画など地域の活動に熱心に取り組む中、迫力ある火縄銃の試射をする鉄砲隊に興味を持つ。当時、中種子町には鉄砲隊は無く、はじめは西之表市や南種子町の鉄砲隊に入ることも考えたが、やっぱり中種子町にも鉄砲隊を作りたいと一念発起。南種子町の隊長さんに隊の発足を相談。「種子島に鉄砲隊が3つもいるか?」と言われるが、そこはやさしい島の人。すぐに大阪の澤田先生を紹介され、所作を習いに行き、自費で数十万円の鉄砲も買い、射撃も習得、3ヶ月ほどで総勢10名の「種子島鉄砲隊」を立ち上げた。

「一番は周りの人たちに助けられて結成できた」ことと感謝し、その行動力が周りの人たちを奮起させたのである。「鉄砲伝来を知るには、歴史の本などより火縄銃の轟音。実際に知りたいと思ったのは、島外に出ていたからこそ。鉄砲の魅力を感じたし、島外で生活をしたからこそ、島で気付かなかった良さを感じることができた。これも帰る要因の一つだった」

若い人たちの活躍がこれからカギ

今では、種子島初となる女性メンバーも加入し16名で活動。鉄砲隊装束を身にまとい、チャーター機の歓迎や、町の行事等などで年に10回ほど試射演武を行う。正直、中種子町にあまり縁のなかった鉄砲伝来の歴史。深田さんの行動力によって身近に感じられるようになった。そして、様々な活動を展開してきた深田さんは若い人たちの斬新なアイデアにも期待する。「鉄砲はもちろん種子島にはまだまだ沢山良い所があるから、若い人たちに知恵を借りて後世に残していきたい。これからは若い人たちの活躍がカギ」と種子島の未来を見据える。

深田和幸さん

種子島鉄砲隊のメンバー

よいらーいき祭りや農林漁業祭など様々なイベントにて、火縄銃の轟音とともにオープニングを飾る種子島鉄砲隊

増田戦跡

九州海軍航空隊種子島基地跡

牛之原桜同志会や種子島鉄砲隊で活躍するメンバーは、もう一つライフワークとして増田戦跡の発信や認知の向上に努めている。「この辺りは、九州海軍航空隊種子島基地の関連施設があったところ。防空壕や指令室、弾薬庫、掩体壕、レンガ製の煙突が残る風呂場や炊事場もある大事な遺構」で、理解を深めてもらうために案内看板を立てたり、戦跡が荒れないように清掃活動等を行っている。

「戦中は、基地建設により強制移転させられた経緯もある。かつて増田では最大の集落。終戦とともに再入植を認める御触れが出て、私達の先祖は戻ってきたが、戻らなかった人もやっぱりいて、違う地区に定住した。けれども、その子供が私と同じ世代で、一緒に活動しているメンバーだったりする。だから、一緒に活動を続けてその歴史も後世に伝えていきたい」と地域の“守り手たち”によって種子島にある数々の貴重な遺産が後世へと傳えられていく。

多くの人に訪れて頂くため、おもてなしの心で案内板を立てたり、戦跡が荒れないよう定期的に清掃活動を行う向井町集落の人たち。

戸畑の煙突

かまど跡や浴槽跡が今も残る炊事場と風呂場跡

九州海軍航空隊種子島基地之碑

神風特別攻撃隊の考案者の一人源田實氏書の記念碑

戸畑の井戸跡

九州海軍航空隊が戦時中に水源として掘削し平成28年3月まで集落の生活用水として使用されていた井戸跡

入植記念碑

軍用地として指定されたことにより、やむなく強制移転させられた住民の一部が戦後再入植した経緯などが記された記念碑

掩体壕跡

飛行機を敵の攻撃から守るために山を切り抜き偽装網などをかぶせた場所

垣添隊の砲台跡

米軍の上陸を水際で防ぐために断崖に掘られた海軍陸戦隊の砲台跡

弾薬庫跡

高さ約1.3m、幅約5m、奥行き約10mのコンクリート製弾薬貯蔵庫跡

航空基地作戦室跡

厚いコンクリートで造られた種子島基地の作戦室跡

移住SURF RIDER

中種子町に住みたくなるお話し　小谷将司さん

「大踊り北の町」を踊る小谷さん

現在は会社員で以前はサーフボードを作る仕事をしていた

サーフィンが好きで移住地を探すも一番良かった種子島

中之町集落で昔から伝承される「大踊り北の町」。艶やかな衣装と太鼓と鳴り物、リズミカルな踊りで目をひく種子島の伝統芸能。若手ながらこの伝統芸能に参加している小谷将司（43）さん。実は小谷さんは20代の時に増田に移住してきた移住者。サーフィンが趣味で、移住する前は愛知県で会社員をしていた。サーフィンは19歳から始め、21歳の時に先に移住していた高校の先輩のつてで初めて島を訪れ、1年程サーフィン一色の生活を送り「種子島すごくいいな」と感じ、島で今の奥さんとも出会い3カ月余り中種子町で暮らした。その後一旦は島を離れたが、24歳の時、第一子誕生とともに種子島に戻ってくる。「サーフィンが好きだから、他に良い場所が無いか色々探して旅をしたが、あまりピンとくる場所もなく、結局は種子島が一番よかったし、子供ができた時に子育てとか色んなことを考えて、奥さんの出身地で環境も良かったから島に帰ろうと思った」と移住したきっかけを話す。

地元の人と移住者の素敵な関係

種子島は「サーフィンのメッカ」。1990年代から島に移住するサーファーも増え「当時、僕らが受け入れられたのは、最初に移住をした人たちが地ならしをして頑張っていたから移住サーファーの土壌ができていた」と話す。当時、島では地元民と移住サーファーの垣根のない交流が確立され、すんなり入れる環境が整っていた。増田に移住した最初の頃は、中種子町でサーフショップを営み、仕事、子育て、サーフィンと島の生活に馴染んでいった。そんな暮らしの中、集落の行事等にも参加し役を頂いたりした。「とにかく集落の人たちが受け入れてくれたし、集落の文化など色んなことを教えてくれて居心地がよかった」。そして、子育てなど子供を第一に考える小谷さんは「移住者なので、どこに住むかとか子供をどの小学校に入れるとか自由に考えられる。僕の場合は、増田の人たちに良くしてもらっていたからここに住み続けているし、増田の小学校に子供を入れたいと思った。子供の成長のことを考えたらPTAだったり育成会だったり親としてしっかりとしないといけない。その延長線上で地区の行事にも参加している」と最初は、子供のためと考え参加した地区の様々な行事。しかし、やればやるほど楽しくハマっていった。「地域ぐるみで子供を見てくれる。それをいつも感じられてありがたい。都会だったらなかなか無いことなので。子供のことだったり、町の行事だったり、そんな色んな島の出来事がリンクして子供も親も世界観が広がりその中で楽しめている。大変なこともあるけど子供もたくましく育ち自分も色々な事を教わる。そこが良いのかな」。今では、移住後に生まれた長男も専門学校に通う歳となった。

移住の心得

最近は地方移住が、雑誌やWEBに取り上げられブームとなっているが、移住したら人付き合いや環境に慣れるのに苦労したと耳にすることもある。しかし小谷さんは「移住者の先駆け的な人たちが土壌を作ってくれたから今の僕らがある。郷に入れば郷に従う。少しずつで良い、島の文化に人に慣れ親しんでいって欲しい。新しく移住してきた人たちに対して、地域での生活の仕方や行事の入り方だったり色々な事で協力できたらと思っている」移住してきて20年以上経つ小谷さんは両方の気持ちがわかる人。移住者にとって実に心強い。

大人たちは飲み方その横で育つ子供たち

集落は小さなコミュニティであり、その中の関係は色濃く一つの家族のようなものかもしれない。大人たちは飲み方で楽しみその横で子供たちが遊んでいる。大人も子供も行事に出て一緒に楽しむ。そこにつまらない日常は無く集落は居心地の良い場所。小谷さんの笑顔で話す姿に島暮らしの充実を感じた。

中種子町では移住者のご相談について、以下のサポートを行っています。

●空き家情報の提供（ある場合）　●地域定住支援事業補助金のご案内　●中種子町での生活の様子などについての情報提供

〈お問合せ〉中種子町役場 企画課 地域振興係 電話：0997-27-1111（内線210）

相撲が地域を形成する

油久の相撲部屋

種子島では相撲を取るのが楽しくなる

種子島を廻ると、神社や公園、学校など各地区あちこちに土俵があることに驚く。種子島では昔から相撲が盛んで、子供から大人まで「のこった、のこった」と行司の掛け声に相撲を取る相撲大会が、各地区であるほどだ。特に町主催の相撲大会では、多くの人が参加し地区のプライドをかけてみんなが「がっぷり四つ」の真剣勝負。土俵際からは、一際大きな声援が飛び、圧倒的な強さや土俵際からの逆転など泣いたり笑ったりと、幾つもの名勝負と人間模様がそこにはありホントに相撲が楽しいと感じる。

大相撲さながらの「奉納相撲」

もともと相撲は神社の神事として取られるもので、島で相撲が盛んなのは奉納相撲がきっかけ。秋の大祭では、境内で相撲を取る姿を目にするが、ひときわ賑やかなのが油久神社。参道入口には「日高部屋」や「秋田部屋」と大相撲を思わせる大きなノボリが幾つも並び、大銀杏の大木がある境内の土俵では白熱した取組が行われる。油久は、伝統的に相撲が文化になっている地区。相撲をもっと盛り上げたいと日高健一郎さんが相撲同好会を立ち上げ、このノボリも賑やかにしたいと大相撲さながら。活躍した先輩たちの苗字や自分の名を取って作っている。地区内の小学生は全員参加、中学生も男子は全員参加と子供のころから相撲を取る風習も組織だって根づいている。はじめて相撲を取る子供はまわしを着けることが恥ずかしくて抵抗があるようだが、相撲を取る大人の姿をカッコいいと感じて自分もやっていくうちにハマっていく。相撲道は、礼儀や品格を重んじる人間作法。子供たちは大人になっても相撲を取り続け、先輩から後輩へと継承され、文化として根づき、今では相撲が一つの柱となって地域を形成している。

「青年団」は油久の盛り上げ役

油久にある青年団の若者たちは、みんな一度は相撲を取った「仲間同士」。奉納相撲でも参道入口では、仲良くうどんのもてなしを手伝う姿に雰囲気の良さを感じる。地区の未来のため、今では彼らが率先して地区の行事に参加し、盛り上げ役を買って出ている。

境内に相撲場があり、巨木の大楠と戦没者慰霊碑が鎮座する油久神社

一石三鳥で地域の拠点となる 油久げんき村

下村美智代さんと秋田真美さんに看板犬のハナコちゃん

地域のお年寄りを買い物難民にしたくない

県道75号線を挟んで油久小学校の前にある油久げんき村。看板犬のハナコちゃんが訪れる人を人懐っこくお迎え、店内は、見るからに美味しそうなお弁当やお惣菜に、お米やお豆腐、中種子の特産品などが並ぶ地区唯一のお店。代表の秋田真美さんは「地元のお店が減ってお年寄りが買い物ができるところが無くなってしまった。近くにちょっとしたお店がないとお年寄りにとっては死活問題。買い物難民にしたくなかった。下村美智代さんと何かしようと話して元はJA支所だった場所を購入して6年前に油久げんき村を開いた」と主婦仲間と一念発起し立ち上げた。

気軽にみんなが集まれる場所

地元の野菜やお豆腐、お菓子などを揃え小売り専門でスタート。「お年寄りの方々も喜んでくれた」と充実した店舗運営を続けたが「地区には、外出をあまりしないお年寄りもいらっしゃったので」と秋田さんは里信子さんと一緒にお年寄りが楽しめる体操教室を始める。「お買い物以外でもお年寄りのみんなが気軽に集まる場所を作りたかった」と買い物に来ていなかったお年寄りも集まるようになり、笑い声がより一層溢れる場となった。今では嬉しいことにお年寄り以外の方々も交流の場として年齢問わずみんなが活用している。

自由に働ける場づくり

一年前からは、小売りから徐々に地元の新鮮な食材を使ったお弁当やお惣菜、オードブルに絶品の自家製「めしみそ」の販売などに力を入れ人気を博している。秋田さんは「主婦4、5人で朝5時から午前中で弁当を作り、その後は他の仕事をしたり畑仕事に行ったり子育てしたり、お年寄りや小さな子供がいる主婦も働き、みんな少しの時間でも働きたいと思っているがなかなか無い。だからきっちり縛られず、楽しんで自由に働ける場を作ることも考えていた。実際に小さい子供を連れてきて働いている主婦もいる」

月一の体操教室を楽しみに油久げんき村に集まるお年寄りの皆さん

油久げんき村を拠点に発信したい

買い物に困るお年寄りのために始めた油久げんき村。みんなが寄り合うにつれて自然と声掛けも増し、お年寄り宅を訪問したりして見守りの役も行っている。そして、地元の主婦が家庭の味で作る美味しいお弁当。秋田さんは「これから先もやめないで続けていきたい。働く主婦も喜んでいるし、お年寄りも楽しみにして嬉しい声も聞く。ここを拠点に発信したいし、『何かあったら油久げんき村』という存在になれれば」と語り、地域密着型のお店、福祉、雇用と「一石三鳥」の役をこなし、今では地域の拠点として、そこに暮らす人たちが、気軽に行き交い地域の元気が集まる場所となっている。

伝承保存食の絶品「めしみそ」と家庭の味を大切にした地元で人気のお弁当